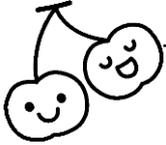


ねぎしようちえんだより 6月号



探究を支える

園長 大村 弘子

「事件発生」と言いながら、年長ぞう組の子供たちがテラスのプランターの周りに集まっています。ぞう組が育てているジャガイモの葉っぱにいくつもの穴が開き、黒い点々がたくさん付いています。「どうしたんだろう」「病気かな」と心配そうに虫眼鏡で見ていると、「あ、何かいる」とたくさんの黄緑色の小さな虫を発見しました。早速、図鑑で調べて、「尺取り虫に似ている」「コガネムシの幼虫かな」「オオスカシバの幼虫に似ている」などと話をしています。

観察ケースに入れて、様子を見ることになりました。「本当にこの虫がジャガイモの葉っぱを食べたのかな」ということから、ジャガイモの葉、落ち葉、キャベツをケースに入れて、一晩置くことにしました。

次の日の朝、「やっぱり、この虫が食べたんだ」「ほら、キャベツと落ち葉は全然食べてないでしょ。ジャガイモは穴が増えている。」3種類の葉の変化を比べて、この虫がジャガイモの葉を食べていることが分かりました。「いったい何っていう虫なんだろう」と友達と話し、図鑑で調べています。黄色い粒を見付け「卵かもね」と探究は続きます。

家庭でも図鑑やネットで調べてきて、次の日に友達と伝え合う姿が見られました。お家の方が子供たちの知りたい気持ちに寄り添い、同じように興味をもって一緒に調べてくれて、子供たちはうれしかったことでしょう。保育室には、事件発生からの一部始終が写真やイラスト入りで掲示され、それを見ることで、情報共有され、子供たちの知りたい気持ちはより大きくなっていくようでした。

毎日の生活や遊びの中で、「何だろう」「不思議だな」「どうしてだろう」と感じる力、気付く感性を育みたいと思います。アゲハチョウの幼虫がさなぎ、蝶と形を変えること、砂場にためた水がいつのまにか減ること、ダンゴムシが丸くなること、ナメクジにはカタツムリのような殻がないこと、など不思議なこと、知りたいことはたくさんあります。それらに気付き、おもしろいと思い、自分で見たり、触れたり、試したりなどして、少しずつ分かっていく過程を大切にしています。正しい知識を早く効率よく獲得することよりも、試行錯誤し、比べたり、自分で、あるいは友達と調べたりする楽しさを感じることで、また更なる気付きや発見につながっていきます。この探究の連続が『主体的・対話的で深い学び』であり、小学校以降の学習にもつながっていくものだと考えます。

テラスのキンカンの木には今アゲハチョウの幼虫が11匹、柔らかな新芽を食べて成長中です。ぞう組、うさぎ組の保育室でも育てています。年中うさぎ組では毎朝登園すると、まず保育室の飼育ケースを見る姿があります。成長の変化を見て感じることで、命を大切にしようという気持ちも、より実感のあるものになると思います。園では、子供たちが見つけた疑問や不思議を大切に、自分たちで探究していく過程を一緒に楽しみながら支えています。

俳句ニュース

本園の「俳句の会」講師の先生が『現代俳句協会会報』にて、本園の取り組みを紹介してくださいました。一部抜粋いたします。

ある幼稚園では、親御さんと幼児と一緒に語り合っただけで俳句を完成させる「親子俳句教室」の指導を行っている。この幼稚園は、もう数十年、卒園時に句集を作っているのだが、それが伝統になりつつある。俳句を学ぶことに於いて、親子共に季節の移ろいや小さな生き物への興味が敏感になっているという。嬉しいことだ。

先日、第1回俳句の会を実施しました。ぞう組は、普段の遊びの時に5文字の言葉集めを楽しみました。「ダンゴムシ」「しおむすび」など遊びや生活の中にある言葉がたくさん出てきました。それを講師の先生と一緒に五・七・五の中に取り入れて俳句に仕立てました。普段何気なく、見ているものも言葉に表すと途端に生き生きとしてみると感じました。